

# 湯谷

登場人物

シテ・湯谷（宗盛の寵愛を受ける）  
ワキ・宗盛（平家の長）

シテ連・朝顔（シテの故郷池田の宿よりの使い）  
ワキ連・太刀持（宗盛の従者）

## 宗盛の屋敷にて

ワキ これは平の宗盛なり。さても遠江（とおとうみ）の国池田の宿の長をば湯谷と申し候。久しく留め置き候所に。老母のいたはりとして度々暇（いとま）を乞ひ候へども。此春ばかりの花見の友と思ひ。未だ暇を出さず候。いかに誰かある。

遠江＝現静岡県 池田の宿＝磐田市の付近

太刀持 御前に候。

ワキ 湯谷暇の事を申さばこなたへと申し候へ。

太刀持 畏まつて候。

## 湯谷の宿所に朝顔がやってくる

シテ連 夢の間惜しき春なれや。夢の間惜しき春なれや。咲く頃花を尋ねん。

これは遠江の国池田の宿の長者の身内に。朝顔と申す女にてさむらふ。さても池田の宿の長をば湯谷と申し候。宗盛の卿に召し置かれ給ひ。

御下り＝里帰り  
御いたわり＝病状

久しく御下りもさむらはぬ所に。老母の御いたはり以ての外に御入り候程に。此度は朝顔が御迎ひに上り候。此程の旅の衣の日も添ひて。旅の衣の日も添ひて。幾夕暮の宿ならん夢も数添ふ假枕。明し暮して程もなく。都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。急ぎ候程に。これははや都に著きて候。やがて案内を申さうするにて候。いかに此の内に誰か御入り候。池田の宿より朝顔が御迎ひに上りたる由それぞれ御申し候へ。

シテ 草木は雨露の恵。養ひ得ては花の父母たり。まして人間に於てをや。

あら御心許なや候。

シテ連 池田の宿より朝顔が御迎ひに参りて候。

シテ 朝顔と申すかあら珍しや。さて老母の御いたわりは何と御入りあるぞ。

シテ連 以ての外に御入り候。

シテ 御暇の出でぬにより久しく下ることも無し。さてお文のあるか。

シテ連 さん候お文の候。

シテ あら笑止や。此のお文にも時を待つやうに見えてある。これを上の御目に懸けて御暇の事を申さうするにて候。

## 宗盛の屋敷を湯谷が訪ねる

シテ いかに誰か御入り候。

太刀持 誰にて御座候ぞ。や。湯谷の御参りにて候。

シテ 参りたる由御申し候へ。

太刀持 いかに申し上げ候。湯谷の御参りにて候。

ワキ こなたへと申せ。

太刀持 こなたへ御参り候へ。

シテ 老母の方より文を上げて候程に。これをそと御目に懸けたう候。

ワキ 何と老母の方よりの文と候や。見るまでも無しそれにて高らかに読み候へ。

シテ 甘泉殿の春の夜の夢心を砕く端となり。驪山宮（りさんきゆう）の秋の夜の月終り無きにしもあらず。末世一代教主の如来も。生死の掟を

「甘泉殿」以下シテは老母よりの文を読む。

「甘泉殿」は漢の武帝が李夫人と過ごした、「驪山宮」は玄宗皇帝と楊貴妃が過ごした宮殿。

ば免れ給はず。過ぎにし二月の頃申しし如くに何とやらん此春は。年古りまさる朽木桜。今年ばかりの花をだに。待ちもやせじと心弱き。老の鶯逢ふことも涙に咽ぶばかりなり。唯然るべくはよきやうに申し。暫しの御暇を賜はりて。今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の仲なるに同じ世にだに添ひ給はずは。孝行にもはづれ給ふべし。唯返す返すも命の内に今一度。見参らせたくこそ候へとよ。

老いぬればさらぬ別れのありといえは

いよいよ見まくほしき君かなと(和歌)

故事(ふるごと)までも思ひ出での。

涙ながら書き留む。そも此の歌と申すは。そも此の歌と申すは。在原の業平の。其の身は朝に隙無きを。長岡に住み給ふ老母の詠める歌なり。さてこそ業平も。さらぬ別れの無くもがな。千代もと祈る子詠みしことこそ哀なれ。詠みしことこそ哀なれ。

今はかやうに候へば。御暇を賜はりさむらへ。東へ下りさむらはん。老母のいたわりはさる事なれども。さればとて別の事の有るべきか。此春ばかりの花盛。いかでか見捨て給ふべき。

御言葉返すは恐なれども。はや此の間にも何とかなりてさむらふらん。都の花はさる事なれども。花は春あらば今に限るべからず。これはあだなる玉の緒の。永き別れは如何ならん。唯御暇賜はりさむらへ。いやいや余りに心弱き。身に任せては叶ふまじ。いかにも心を慰みの。花見の車同車にて。共に心を慰まんと。

牛飼車寄せよとて。牛飼車寄せよとて。これも思の家の内。はや御出と進むれど。心は先に行きかめる。足弱車の。力無き花見なりかり。

### 牛車に乗って清水寺へ

名も清き水のまにまに留め来れば。山は音羽の花盛。

東路とても東山せめて。そなたも懐かしや。

春前に雨有って花の開くること早し。秋後に霜無うして落葉遅し。山外(さんと)に山有って山尽きず。路中に路多うして路窮まり無し。山青く山白くして雲来去す。

人樂しみ人愁ふこれ皆。世上の有様なり。誰か言っし春の色げに長閑なる東山。四條五條の橋の上。四條五條の橋の上。老若男女貴賤都鄙色めく花衣袖を連ねて行く末の。雲かと見えて八重一重。咲く九重の花盛。名におふ春の景色かな。名におふ春の景色かな。河原面を過ぎ行けば。急ぐ心の程も無く。車大路や六波羅の地藏堂よと伏し拝む。観音も同座あり。闍提救世(せんだいくせ)の方便あらたに。たらちねを守り給へや。

げにや守の末直に。頼む命は白玉の。愛宕(おたぎ)の寺も打過ぎぬ。六道の辻とかや。

げに恐ろしや此の道は。冥途に通ふなるものを。心ほそ鳥部山。

煙の末も薄霞む。声も旅雁の横たはる。

北斗の星の曇り無き。

御法の花も開くなる

経書堂(きょうかくどう)はこれかとよ。

朽木桜 老いの身を喩えた

親子は一世の仲 親子は一世、男女は二世、主従は三世と信じられていた。

和歌大意(年を取ると尋常でない別れがあるからこそ、あなたに逢いたくてたまらない)

朝 宮仕えさらぬ別れのなくもがな 尋常でない別れなど無くなつて欲しい

牛飼 車を引く牛を御する者。

シテが車の作り物(舞台道具)に乗ることで清水寺へ移動中であることを現す。以下車窓からの春の景色を言葉で表現する。

河原面 鴨川の岸 車

大路 大和大路 六波

羅 六波羅蜜寺 地藏

堂 現存しない 闍提

救世 悪人をも救う観

音の慈悲 愛宕の寺

愛宕念仏寺 六道の辻

愛宕寺門前 鳥部山

古くから火葬場とされていた(六波羅蜜寺

の南東) 経書堂 来光

シテ 其のたらちねを尋ねなる。子安（こやす）の塔を過ぎ行けば。

院の俗称。三年坂にある。子安の塔Ⅱ堂内に

同音 春の隙行く駒の道。

子安観音が安置される。かつては仁王門前に

シテ はや程も無くこれぞ此の。車宿り。

あった。

シテ 馬留め。ここより花車おりぬの衣（ころも）播磨瀉飾磨（はりまがた

観世音Ⅱ観世音菩薩。

ワキ 南無や大慈大悲の観世音。母に逢はせてたび給へ。

現世を救うとされる。

太刀持 いかにか誰かある。

御堂Ⅱ清水寺の観音堂

ワキ 湯谷はいづくにあるぞ。

御堂Ⅱ清水寺の観音堂

ワキ 未だ御堂に御座候。

御堂Ⅱ清水寺の観音堂

太刀持 こなたへと申せ。

御堂Ⅱ清水寺の観音堂

シテ いかにか申し候。上様は地主の花の下に御酒宴の始まりて候。急ぎ御参りあれとの御事にて候。

地主権現Ⅱかつて清水寺の鎮守社であった。都有数の花の名所とされる。

### 地主権現前にて花の宴が始まる

ワキ あら面白と咲いたる花どもや候。いつの春よりも面白う見えて候。

地主権現Ⅱかつて清水寺の鎮守社であった。都有数の花の名所とされる。

シテ げにいつの春よりも面白う見えて候。

地主権現Ⅱかつて清水寺の鎮守社であった。都有数の花の名所とされる。

シテ 皆々御短冊を参らせられて当座を遊ばされ候へ。げにや思内に有れば色外に形る。

地主権現Ⅱかつて清水寺の鎮守社であった。都有数の花の名所とされる。

同音 よしや由なき世の習。歎きてもまた余りあり。

「花前に」以下、漢詩句を引いたか。

シテ 花前に蝶舞ふ紛々たる雪。

「花前に」以下、漢詩句を引いたか。

同音 柳上に鶯飛ぶ片々たる金。花は流水に随って香の来ること疾し。鐘は寒雲を隔てて声の至ること遅し。清水寺の鐘の声。祇園精舎を現し。

「清水寺の」以下、平家物語冒頭部分より引く。

諸行無常の声やらん。地主権現の花の色。娑羅双樹の理なり。生者必滅の世の習。げに例あるよそほひ。仏も本は捨てし世の。半ばは雲に上見ぬ。鶯のお山の名を残す。寺は桂の橋柱。立ち出でて峯の雲。花やあらぬ初桜の。祇園林下河原。

寺は桂のⅡ下河原にあつた桂橋寺が霊鷲山と号していた。祇園林

シテ 南を遙かに眺むれば。

寺は桂のⅡ下河原にあつた桂橋寺が霊鷲山と号していた。祇園林

同音 大悲擁護（だいひおおご）の薄霞。熊野権現の移ります御名も同じ今熊野。稻荷の山の薄紅葉の。青かりし葉の秋。また花の春は清水の。唯頼め頼もしき春も千々の花盛。山の名の。音羽嵐の花の雪。深き情

悲 今熊野Ⅱ今熊野神社。和歌山の熊野神社を都に勧請した。稻荷の山の薄紅葉Ⅱ和泉式部の「時雨する稻荷の山のもみじ葉は 青かりしよりおいそめてき」より引いた。

シテ 一つきこし召され候へ。

詞の種Ⅱ和歌のこと。

同音 何と一つ飲めと候や。さらば舞を御舞候へ。

ワキが上の句を詠み、

シテ 何と舞を舞えと候や。

ワキが下の句を継いだ。

ワキ なかなかの事。（中ノ舞）

詞の種Ⅱ和歌のこと。

シテ なうなう只今の村雨に花の散り候はいかに。

ワキが上の句を詠み、

ワキ げに只今の村雨に花の散り候。あら憎の雨や候。

ワキが下の句を継いだ。

シテ 今までは盛と見えつる花を散らすは。あら心なの村雨やな。春雨の。

同音 詞の種Ⅱ和歌のこと。

同音 春雨の。降るは涙か。降る涙か桜花。散るを惜しまぬ人やある。

ワキが上の句を詠み、

ワキ 不思議やな由ありげなる詞の種取り上げ見れば。

ワキが下の句を継いだ。

シテ いかにせん都の春も惜しけれど。

ワキが下の句を継いだ。

シテ 馴れし東の花や散るらん。

ワキが下の句を継いだ。

ワキ

げに哀なり道理なり。疾（と）く疾く東に下るべし。

シテ

何御暇と候や。

同音

なかなかの事疾く疾く下り給ふべし。

あら有難や嬉しやなこれ。観音の御利生なり。これまでなりや。

嬉しやなこれまでなりや嬉しやな。かくて都にお供せば。又もや御意

の変るべき唯此儘（このまま）にお暇と。木綿附の鳥が鳴く。東路指

して行く道の。東路指して行く道の。やがて休らう逢坂の。関の扇（と

ざし）も心して。明け行く跡の山見えて。花を見捨つる雁の。それは

越路我はまた。東に帰る名残かな。東に帰る名残かな。

御利生 〓 衆生に利益を  
下さること。

※同音とは地謡のこと。地謡は多くは八人で構成され、シテの演技を助けたり、ナレーションの役割を負う。